

第4部 関係機関・団体ヒアリング調査結果

第1章 こども・若者や保護者の状況について

関係機関・団体に、活動を通して把握されるこども・若者や保護者の状況についてうかがいました。以下に、その内容をカテゴリーごとにまとめたものを掲載します。

問 こども・若者を取り巻く課題について、日ごろの活動を通じて、こども・若者たちの様子で何か気になっていることがあればお教えてください（枠下の回答欄にあてはまる番号すべてを入力してください）。

気になっていることとして挙げられた内容は、「家庭の環境について」「虐待について」「ひきこもりや不登校について」「障害のあるこども・若者について」が30件以上と多くなっています。また、「特に気になることはない」の回答はありませんでした。

カテゴリー	件数 (n=44)
1 家庭の環境について	39
2 虐待について	31
3 ひきこもりや不登校について	31
4 居場所（サードプレイス）について	20
5 ヤングケアラーについて	20
6 貧困について	24
7 障害のあるこども・若者について	30
8 外国につながるこども・若者について	27
9 こども・若者の性犯罪・性暴力について	11
10 その他	5
11 特に気になることはない	0

1 家庭の環境について

- 障害、精神疾患をお持ちの親御さんのもとに育つお子さん、または支援者からみて養育が難しいと感じられる親御さんのもとに育つお子さんと関わる機会が多く、支援の難しさを感じている。
- 高齢出産が増えているのか、祖父母の介護と育児（ダブルケア）問題。
- 男性の育児休業の取得が進められて、平日もセンターには父親とこどもの来所が増えている。その事自体は、子育ての負担が母親にだけ集中せず、いい部分である。しかし一緒に子育てしていく中で、母親も父親も同じ悩みを一緒に抱えて、一緒に落ち込む姿が見られる。又夫婦が一緒に過ごす時間も増えることで、慣れない子育てを通して見えていなかったお互いの価値観が浮き彫りになって対処の仕方に戸惑うことが多い。
- コロナ禍の3年間、外出制限下の中では、産前・産後・子育てと周りからの助けが得にくく、親子で外出を控えていたことで、子育ての地域資源を得ることが出来ず、支え合う子育て仲間の出会いもないまま子育てをしてきた方が多かった。こどもも経験不足からの発達の遅れが増えているように感じる
- 精神疾患を抱える保護者が孤立し、子ども・家庭問題が潜在化し、支援につながりにくい状況。
- 幼い時からゲームやネットなどに触れる機会が多く、夜が遅く朝起きられないなど大人が守り切れていないと思われる。
- 母親自身に心因性疾病や、被虐待経験などがある場合、こどもへの影響が強く出ていると思います
- 家庭環境について特に最近思うのは、ひとり親家庭が増えたこと。それにより不登校生徒が生じやすくなっている印象があります。もちろんそれに伴い学習への意欲も減少するため学力の低下がみられる印象があります。家庭という安全地帯に閉じこもり、義務教育のギリギリまで動き出せず、高校への進路選択からが彼らの新たなスタートになっている事例が多く見受けられます。
- 孤立したご家庭が多い。個々にさまざまな原因や世代間連鎖や個人の特性の問題などがからんでいるものの、傍目には見えにくいものが多いため、本人たちの怠惰や、低能力、不作為とみなされることが多いと感じる。
- 特に出産後表面化する、子育てへの苦悩、虐待や養育困難、DV、などの困難を抱える人は、実はこどもの時からの虐待やネグレクト、夫婦間暴力にさらされたり、親の宗教、教育や偏ったしつけへの強いこだわりなど、困難な養育環境で育ってきている。努力で自分の家族を手に入れて、あこがれていた「よい家族」を目指していたが実際はうまくいかず、また自分を苦しめることになる、という人が本当に多いと感じる。めぐりめぐってこの状態にならざるを得ない人たちの支援をしていると、こどもの時の過酷な生き方が今に至っていることを見せつけられ、支援者として申し訳ないような思いに駆られることがしばしばある。支援を求めることを知らず、求めて裏切られた経験を持つ人の支援希求の低さもしばしば感じている。
- 出産に関しては父の育児休暇取得が急激に進んでいるが、メリット・デメリットの両面が見られる。現状では父が養育者として学ぶ場や支援メニューは十分とは言えない。
- 少子化等で、妊娠出産についてリアルなイメージがないまま子育てを始める家庭が多い。対面の両親学級や妊産婦が交流できる場所が必要と感じる。

- 少子化や核家族化が進み、両親が子供に関わる時間が減少している部分を祖父母が両親に代わってサポートする機会も時間も減少しています。子供たちは、両親からも祖父母や近隣の大人からも悪いことをしても叱られる、見守ってもらうことも無く、希薄な人間関係となり人とのかかわり方がうまく行えない、自分の意見がうまく伝えられない、相手の気持ちを理解しようとしてできないなど、人間関係の構築が難しくなっているように感じられます。
- 活動を通して接触するのは母親が多いが、精神疾患を患うケースが大変増加している。心に悩みを抱えている人も実感として多い。
- 家庭環境がよくなかったことや、親自身が虐待などを受けていたことなども影響しているケース、また親自身も発達障害や精神疾患があったりするケースも多く、親に対するメンタルケア・情報提供、孤立させないような支援が必要である。親の支援が第一で、子ども本人につながる事が難しいケースが多い。
- 学校は、勉強以外のことも、生きていく為に大切な対人関係も学べる場だと思っている。しかしながら、より一層の学力向上に重きを置いて、受験準備の塾に期待することも・保護者もいるようだ。共働き夫婦が増えている地域やその時の経済状況で、保護者の考え方も様々だと捉えている。
- 親がまだまだ子どもであり、十分育っていないと感じるケースが多い。子どもの挑発に乗ってしまって、子どものケンカのようにになってしまう。
- 関係者間の情報共有の会議があるが、母親がシングルだったり、夫の協力が無い・DVといった要因で母親が病んでいるケースがかなりある。公的な支援につながっている方・サポートを受け入れて下さる方と、結構ですとシャットアウトされる方とがいる。関係機関の方が何度も足を運んだりアプローチしたりするが、人と接すること自体に難しさがあるケースや、相談したが期待にそぐわず諦めてしまうケースがある。

2 虐待について

- こどもを持つ家庭の中で、夫婦げんかでのDV、家庭内のパワーバランスが強く表れ、来室相談に来る方が一定数います。在宅ワークの家庭が増えたことによる生活に支障があり、(父親のリモート仕事中にこどもが騒がないようにこどもを連れて外出する。昼食を準備するために一旦帰宅するなど)生活に配慮することが多くなっています。
- 家庭環境の厳しさという点でいえば、虐待とつながります。いわゆる貧困等の環境ではなく、不適切な関わりという点で、環境的にきびしいお子さんが多くいると感じます。
- 2023年度にコロナが5類になり通常運営するようになったことで、今まで家に閉じこもっていたお母さんたちが来所するようになってきました。その中でよく聞かれるのが育児に対する不安の声です。今まで人とのかかわりが制限されてきたことにより、ネットによる情報に頼るけれど情報も氾濫しており何が正解かも分からなく、不安を高めていっている利用者が多いと感じます。そして、その育児不安から虐待につながる危険をはらんでいるということもうかがわれます。
- いわゆる連れ子に対する、愛着不足。虐待のリスク。
- コロナ禍を経て、保護者とかわることが減ったこともあり家庭の姿や状況が見えてきづらくなっている。そのため、虐待の様子も見えづらい。
- 虐待では、夫婦間の問題が影響していることが多いため介入することが難しい。

- 虐待＝体罰と認識をしている方が多い。認識不足からくる「良かれと思って」の大人の行動が、子どもにとっての虐待に通じていることを周知したほうが良い。子どもの意思を尊重する行動や、言葉かけが少ないように思える。
- 虐待がどういうものかが正確に理解されていないことで、無意識に虐待になっていることが多い。親の帰宅が夜遅く、その間子どもを放置するというのもネグレクトの1つだったりする。また衣服をきちんと着せられていないということなどもある。
- ニュースからの印象などによって児童相談所や養育支援課などのイメージが悪い。つながりたがらない方が多く、本来必要な支援を受けずにいる。社会の中で、児童相談所がお父さんお母さんのためになるという認識が定着してほしい。すぐ保護されてしまうという印象もあるようだ。
- 育児負担感の高まりから虐待に至るケースでは、実家の支援が得られない場合は児を預けることで負担軽減策になるが現在はそれが少ない。低月齢の託児は児童相談所か短期間かの二択。ひと時保育など一時預かりサービスは予約がすぐに埋まる。
- 子どもに接することなく親となることがどうやって子育てしてよいかわからず虐待を引き起こすことが起きています。同年代の関わりだけでなく年齢の違う子供との交流が必要だと感じます。

3 ひきこもりや不登校について

- 幼稚園保育園の登園渋り、小中学生の不登校の相談が増えています。
- コロナ禍の中で、不登校も増加しているように思う。近隣の児童館では日中、不登校の中学生が居場所として過ごしていると聞いた。学校に行かなくても、その子どもに合う、居場所や学びの場が少ない。
- 不登校児童が増えてきていると感じる。不登校になる理由があまり明確じゃないというか、なので打開策がないと言ったらいいか・・・
- 授業には出席できない（教室に入れない）が、学習意欲はあり、大人とのコミュニケーションも十分にとれる生徒へのケア。登校しているが、授業には参加せず、廊下で、タブレットを見ている児童へのケア。
- 卒園児の子どもで、中学生になって引きこもりや不登校になっていることを聞くことが多くなった。中には、中学校に一度もいっておらず、いわゆるト一横に出入りしている話を聞く。関係者として、何も支援できない無力さを感じています。
- 仕事につかず、自宅にひきこもり、友達や隣人との友好関係もないと思われる若者がいるが、家庭内の問題に入っていけず、対応はできていない。
- 様々な形態の不登校児童生徒が増えている実態に加えて、時代背景（少子高齢化や共働き夫婦の増加、デジタル化によるメリットとデメリット）に伴う幅広い年代層の孤立状況を含めたひきこもりが、家庭社会に及ぼす影響は心配でもある。
- ひとり親家庭の子どもが不登校になると小学生でも、一人で家になることになる。保護者が不在の家庭に訪問してくれる、または学習の支援を行ってくれるような支援が必要。
- 学校を中心に、硬直した価値観を強要する空間が多い。不登校の子どもたちは、多くは少し繊細なだけで、炭鉱のカナリアなのではないか、と感じることも多い。多様性を認めあい、違いを許容することが、まだまだ社会全体として、受け入れる準備が足りないと思う。

- 不登校の講演会を開催すると情報を求める区民が多いことに気づく。自分から出ていけない人には居場所づくりのほかそこへつれていく人が必要と感じる。
- 子どもの引きこもりや精神疾患などのケースも生じている。8050 問題も生じており、症状は一人一人違う。40 歳を過ぎて親も高齢だが、家から一步も出ず、親に暴力をふるってしまうケースもある。こうした方がいい、といった話をしにいける相手もあれば、うちには関わってほしくないと言われるケースもある。医師会の先生からは「医療機関につないで」と簡単に言われるが、実際には難しい。

4 居場所（サードプレイス）について

- 不登校生徒の居場所が少ない。ブリッジスクールが週5で利用できるようになったこと、限られますが校内に不登校生徒の別室が設置されたのは、とても大きな改善点だと思う。
- 引きこもっているお子さんたちの地域の居場所が少なくご案内ができないことがある。
- 居場所が少ないと感じる、地域性があり、使いやすい子どもとそうでない子どもの差がある。
- 不登校の子供を持っている親もどのようにすれば良いか分からず悩んでいる。それぞれ一人一人の理由が違うため細かなケアが必要ではないか。不登校の子供も親も居場所があればと思う。
- 学校・家庭は、こどもたちが多くの時間を過ごす場所となっているが、家庭の環境や虐待によって居場所を失うことも少なくない。また、外国籍のこどもにとっては、言語の問題で学校が居場所となりえない場合がある。同じ言語のこども同士が繋がることのできる居場所（オンライン含む）を作る取り組みがあるとよい。
- 居場所は絶対に必要。まずは家が安心して過ごせる場所になることが大事。その上で次に進むときに、たくさんの選択肢があって、いくつかある中で自分に合った居場所を見つけられたら次に繋がっていくので、多様な居場所、多様な支援者が必要である。勉強したい子、遊びたい子、何もしないでぼーっとしたい子、低年齢の子に混ざるのが嫌な子など、その子によってニーズが違う。そこにいる支援者が合うかどうかという点もある。合わない居場所があったときに他の居場所があれば移動できる。曜日や時間帯、家から通えるかどうかの距離の問題もある。

5 ヤングケアラーについて

- ヤングケアラーという点では、調査結果からも本人の自覚がほとんどないという点が大きく心配です。また家庭環境をみると、3歳くらいから、親のケアをしているような子（具体的な世話ということではない）もいて、将来的にヤングケアラーになっていくのではと心配することもある。
- 保護者の精神疾患により、こどもが親を心配し学校へ登校できない等のケース。
- 共働きの家庭が多く、中には自分の時間を優先してしまい、上の子が下の子を面倒見ながら留守番をすることもあるよう。
- 数件それと思われるケースにかかわりだしたが、入り方などに配慮が必要と感じている。
- ヤングケアラーについては、かなり増えてきている。主任児童委員は学校訪問を年1回行って情報交換をしているが、少し前から、下の子をみないといけないから学校に行けていないというケースを聞くようになった。母親が体調不良、精神的な問題で家事ができない、子どもの面倒が見られないなどのケースである。子ども側では「ヤングケアラー」と自覚がある訳ではなく、大変だがやっている、という状況である。

6 貧困について

- 中には生活が厳しく支援が必要ではあるけれど金銭的な理由から通院や入所などを選択肢から排除されているというところも見受けられます。
- 地方から上京し一人暮らしをする大学生（短大生、専門学校生等含む）において、学費以外の生活費をアルバイトで賄う。しかし物価高による生活費の枯渇から食事を制限したり、日用雑貨や生活必需品を削減している。携帯はバイトのシフトや連絡に必要で欠かせないため支払いも高額となりさらに生活費を圧迫している。
- コロナ禍による収入（仕事）の減少がシングルマザーの生活を直撃し、こどもの生活も生きるための最低限となり、成長にともない洋服や食費の増大に追いついていない。
- 親がシングルで子どもをケアする余裕がない。場合によってはシングル起因の貧困（母子家庭にこの傾向があるように感じます）。
- 保護者の方から、引っ越し話が出るが多くなってきた。理由は、森下、白河地域の物件の賃料が高くなってきており住みづらくなってきたこと。また支払えないなどの話を聞いたときに家庭の状況が初めてわかることがあった。
- 収入が少ない貧困の家庭のケースと、収入があっても母親が自由に使えるお金が少ないケース、また、両親はブランドの服を着ていて、子どもはサイズダウンしたものや、汚れたものを着ているのが気になり、着替えをお願いするときに合わせてお願いするケースがある。

7 障害のあるこども・若者について

- 子育てひろばでも発達に課題のあるお子さんが増加しているが、支援機関（子ども発達支援センター・親子教室等）の受け皿が不足している。
- 障害児、特に外国籍や母親が外国籍の場合、子どもが小さいときに障害があっても気づけない、どこに支援を求めているかわからないというご家庭があり、保育園に入り他機関とつながることができたことがあった。
- 保育園では、障害と判断できないことが多い。接し方、対応の仕方で成長過程が変わると感じるが、保護者の考えに差を感じる。ちょっとしたことでも敏感な方と、気にならない方がいるので、早い段階で発達支援の専門の方と関わられるように促している。
- 発達障害が背景にあり、医療機関につながり検査や診断を受け、治療や支援を受けることが望ましいと考えられる不登校のケースが複数存在する。保護者が病院に行くことを受け入れられないケースも存在し、一部の保護者にとって、やはり診断は利益よりも不安が高い。
- 他機関連携が必須で、うまくできるとよいと思っている。
- こどもの障害もさまざまで、発達レベルも個人差が大きい。本人の障害の状況に合わせた保育や教育の保障が十分になされていない事例が見られ、体制整備が必要だと感じる。
- 障害のある子供を養育する保護者が利用できる支援が少なく交流の場も少ない。外出するにはその間の子のケアについて保証されねばならず、保護者自身休養がとれない。
- 早期発見がされると発達障害であれば療育を受けていくことでその後の対応含め大きく変わってくる。障害を受け入れきれない悩みもあるが将来的には受け入れて療育や支援を受けた方が本人も親も苦しまずに穏やかに過ごせているケースが多いと感じている。

8 外国につながるこども・若者について

- 地域性もあると思うが、外国籍の親子の来所が多い。ひろばの中で文化の違いからトラブルに発展することも少なくない。こどもに装飾品を身に付けさせていて、ひろばで外すことが出来ない等。又こども同士の遊びの中で遊具の使い方やこどもへの接し方にも違いがあり、対応に苦慮することもある。
- 保護者の日本語能力が低い場合に、様々な制度の情報が伝わらず利用できない場合がある。また、子供が通訳で負担を強いられ、ヤングケアラー化する場合もある。
- 日本語を十分に理解出来ない児童、生徒のケア。親の日本語の理解が不十分で、学校と親との意思疎通が困難。子（日本語ができる）が親の通訳代わりになっており、子へ必要ない負担がかかっており、度をこすとヤングケアラー化のリスクあり。
- 外国の方の考えを尊重できるように寄り添っているが、主張もつよいので、理解し合えるように寄り添った対応をしている。
- こどもの海外滞在経験に関して、語学力を身に付ける点においては恵まれているようだが、過剰な環境適応状態ではないか、将来の性格傾向に及ぼす影響もありそうで、支援者としての心配が残っている。
- 日本語を母国語としないこどもたちへの支援（学校内での）が不足している。結果的に中途半端にしか日本語を理解していない状態でただ教室に座っているだけのこどもを見かける。

- 外国から日本に移住して、うまく学校生活になじめないお子さんのメンタルケアが必要になってきていると痛感しています。
- 日本語習得が問題。支援の量が足りていないと感じている。
- 虐待で継続支援をしていた事例が海外へ転出した場合、国をまたいで引き継ぐすべもなく、現状はそれきりになっている。
- 外国につながる子どもや保護者については、言葉の壁がどうしてもない。通訳やポケトークの限界を感じる。こころの問題となればなおさら対応が難しい。
- 子どもたちは、やはり親の言語しか使わない。そこが習得できてから日本語や学校の学習ということになる。そうすると、同じ学年の日本人の友人と遊んだりする上で難しく、同じ国の友人と行動する。中学生になるとジュニアリーダー育成の取組があり、とてもよい。日本人・外国人併せて20数名を集めてゲームを行ったが、ジュニアリーダーがうまく指導してくれ、面倒見がよかった。こちらも忙しいので度々は開催できないが、親とも仲良くなれたことで、親との関係がつくれた。
- 外国の子どもたちの不登校については、親が行かせないケースがある。特に中学校から日本に来た子どもは日本語がわからず、そういった生徒用の授業もあるが、行ってもわからないということでひきこもりになってしまうケースがある。
- アジア諸国を中心に、外国につながる子が増えている。子は日本語の習得がどんどん進むが親はそうでないことが多い。学校が手紙を出しても理解できずにそのままとなり、必要なものが揃わないケースが目立つ。

9 こども・若者の性犯罪・性暴力について

- 幼いころから、水着で隠れるところは人前で出さない大切などであることを知らせ、着替えなども気を配っている。興味を持つ時期を見逃さず、子どもに合った対応をしている。
- 性犯罪を犯すこどもの親の認識の甘さが気になっている。
- 精神保健の中で関わる事例の中で、幼少期の被虐待体験を語る人は多い。また性被害を開示する事例もあり、性虐待はまだまだ把握されずに潜在化していると思われる。
- 性違和を感じている子供たちへの正しい理解がなく、本人も理解していないこともあり、それによる性被害につながることもある。当事者同士の居場所がない。

10 その他

- 大人の中の相互不寛容が、分断を生み、ギスギスしたストレスフルな社会を生み、それが、保護者の余裕を失わせ、虐待の引き金になっていると感じる。保護者に対する厳しい視線は教員の言動にも感じる。
- 18歳に達し、児童でなくなった事例の支援を継続することが難しい。児相から18歳以降は保健相談所で、と引き継がれることがあるが精神保健のアプローチだけでは不十分。成人として社会で自立していくためのサポート体制が圧倒的に不足している。
- まずは身近にいる大人（家族）や先生などが、自分らしく、生き生きと楽しく生活している姿を見せることが一番である。親の支援に徹すれば、おのずと状況がよくなることの方が多い。子どもは周りの大人の顔色をすごくうかがっている。大人が大変そうだと我慢したり、大人が気にするだろうと頑張って学校に行ったりすることもある。また、親が忙しくて意見を聞いてもらえなかったことなどをずっと引きずっている。
- 地域における関係性が希薄になっていると感じる。地区によっても違い、昔ながらの下町の雰囲気がある地区では祭りなどもあるので、子どもも大人も一緒に楽しめる交流機会がある。人格形成といたらおおげさかもしれないが、役立っているのだと思う。